

GOMMA & BOOKS

どこかおかしい日本語

日本語誤用辞典

昭和60年10月20日 初版第1刷発行 定価730円
昭和60年12月1日 第4刷発行

著者 吉沢典男

発行者 篠原直

発行所 株式会社 **ごま書房**

東京都千代田区麴町1-10 〒102

電話 東京(239)0231(代) 振替6-171819

印刷 堀内印刷 製本 ナショナル製本協同組合

ISBN4-341-01374-2 C0281(488)

GOMA BOOKS

どこかおかしい日本語

吉沢典男



ごま書房B-374ゴマブックス

まえがき

いま、日本語の乱れや誤用を嘆く声はきわめて多い。

このあいだも、「ご多用の折とは存じますが、枯木も山の賑いですから、ぜひともご出席を賜りたく……」という、結婚式の招待状を受けとって呆れはてていた同僚がいた。見ると、活字で刷ったりっぱなものである。この結婚式、お年寄ばかりを招待したのだろうか。それにしてもよくもまあ、誰からもあやしまれずに発送されたものよ、だ。

しかし考えてみれば、言葉というものは、長い年月のあいだにはソレと気づかぬうちに、いつしか大きく変遷していることも事実だ。最初は誤用であったものも、堂々とまかり通るようになったりする。もし、言葉がすこしも変わらないもの、変えてはいけないものであるならば、現代のわれわれも、「籠こごもよ み籠こごもよ 掘くわ串くしもよ み掘くわ串くし持ち この岳おがに 菜な摘とます兒 家聞かきかな名告ならさね……」(万葉集の第一首・雄略天皇)式に、万葉言葉をしゃべっていなければならぬはずである。

そもそも、言葉が人から人へと伝えられるときには、変わるのがあたりまえだとも考えられる。子どもがよくやる「電報ごっこ」遊びを例にとれば、耳から耳へと伝えられるあいだに、最初の

言葉はすっかり変わってしまった。送り手の発音はかならずしも正確ではないし、受け手も正確に聞きとれるとはかぎらない。加えて、人びとの心理状態によっては、自分の都合のよいように、あるいは自分の理解の届く範囲で、誤解・曲解したまま勝手に造語することまで平気でやるのである。言葉は変わらないほうがおかしいのである。

だからといって、日本語の誤用や乱れをそのままほっておいていい、ということにはならないだろう。とくに、いま日本語を取り巻いている環境は、それこそ、誤用や乱れをおおいにしてくださいといわんばかりの状況にある。漢字制限、新かなづかいなど、大きな文字改革からは、漢字、漢語を軽視する風潮さえ生まれているし、敬語は封建主義の産物だから、民主・平等の世には不要だと考える人もいる。権威を失った親は、家庭内の言葉のしつけを放棄したかのようだ。とくに、テレビや新聞などのマスコミの言葉にまで乱れがふえてきたことは、見過ごしにはできない。いまや人びとは、軽佻浮薄に、**「言葉の自由」**を謳歌おうえんしている観がある。

私は、NHKテレビのミニ番組『ことばの一分メモ——生きていることば』に講師として参画しているが、このわずか一分間の番組が、意外に大きな反響を呼んでいる。やはり、それだけ日本語に関心を持ち、正しい言葉のつかい方を知りたいと思っている人が多いのだろう。

この本では、「日本語誤用辞典」とサブタイトルにもあるように、日本語の乱れ、誤用といっ

た問題について、現時点で気がついた例をなるべく多く拾い集め、小言幸兵衛式になるのをグッとこらえて解説するようにした。各項目の見出しは、「どこかおかしい日本語」をクイズ形式で示すようにしたので、楽しみながら読んでいただければ幸いである。また、巻末に「索引」をつけておいたので、正しい言い方、書き方に迷ったときなど、ご利用いただきたい。

解説・記述にあたっては、多くの国語辞典を参照させていただいた。とくにNHK放送文化調査研究所刊の「放送研究と調査」(月刊)の多くからは、同所・用語研究班諸氏の研究報告を随時参照させていただいた。煩を避けて一々巻号を示すことはしなかったが、多くの教示をうけた。厚く御礼申しあげる次第である。

昭和六十年十月十日

よしざわのりお
吉沢典男

『どきがおかしい日本語』・もくじ

まえがき

3

1

これでナットク!

誤解・誤用だらけの諺・故事成語

9

思わずドキッ!

間違えることんだ恥をかく慣用句の知識

59

2

3

これは意外！

知つてゐるふりして知らない男と女にまつわる言葉

97

4

もう迷わない！

とかくあやふやな漢字の正しい使い方

111

5

どこがおかしら！

わかつてゐるふりしてわがつてゐない言葉づかい

145

6

これは失礼！

あやまつても許されない敬語の誤り

173

本文イラストレーション・鈴木ひろし

1

これでナットク!

誤解・誤用だらけの
諺・故事成語



1

今度
こそ
汚名挽回
とはりきったのは
いいが、またも間
違い。どこがちがっているのか？

「挽回する」というと、何だかよくなるイメージがあるのか、「汚名挽回」という言葉は、週刊誌などでもよくお目にかかる。しかし、これはおかしい。「汚名」は不名誉とか悪い評判のことだから、それをいくら取り戻したところで汚名に変わりはないはず。それをいうなら「名誉挽回」であろう。あるいは「汚名返上」「汚名を雪ぐ」(雪辱という言葉もある)といわなければならない。

野球中継で「江川、『汚名挽回』なるか」と絶叫しているアナウンサーもいるが、いくら江川でも、これではちょっと気の毒ではないか。

2

キラ星の如く
居並ぶスターたち、
ち、というとき、
「キラ星」とはどんな星？

「キラ星の如く」とは華やかなようすを表わすのによく見聞きする表現だが、漢字で書くと、「綺羅星」である。

ただし、これを読むとき「きらほしのごとく」と区切っては間違いになる。「きら・ほしのごとく」と切るのである。なぜならば「綺羅星」という星があるのでなく、綺羅(美しい衣服)が星のように輝いて見えるという意味だからだ。

同様に、華美をこらすことを「綺羅を磨く」というが、けっして「綺羅星を磨く」とはいわない。天にあるキラボシでは磨きようがないからだ。

3

的^まを得る

は、日本語としてはマ
トもでない。間違いを
直し、適切な表現に改めるには？

「的を得た意見」とよく言う。理にかなって、的確な意見というつもりだろうが、これは「当を得た」としなければおかしい。

「的」を使うならば、的（弓矢の標的）に合わせて「射る」、つまり「的を射る」となる。「射る」と「得る」の音が似ているために「当を得る」と混同してしまったようだ。なお「当」は道理にかなうことの意味である。

さらにこの二つは意味まで似ているからややこしい。「的を射る」は、的確に要点をとらえることで、「当を得る」は要点をしっかりとおさえることである。

4

舌の先

が乾かぬうちに、前言をひ
るがえす舌先三寸の輩は誰
にも信用されないが、誤字も困る。

Aと言ったと思ったら、すぐ反対のBと言うような人はけっこう多い。しかし、そうしたときに「舌の先、乾かぬうちにもう逆のことをいっている」と言ったのでは間違いだ。

それをいうなら「舌の根、乾かぬうちに」である。「舌先」にうわべだけで内実が伴わない言葉といった意味があり、内実がないからコロコロ変えられるのだとか、根よりも先のほうが乾きやすいとへ、理屈はつけられるが、ここは「根」でないとまずいのだ。ちなみに「舌は禍^{わざわ}いの根」という言い方もある。言葉は慎重に選びたい。

5

間髪を容れず

の「間髪」の読み方は？
①カ

ンハツ ②カンパツ ③カンカミ

「間髪を容れずに答えが返ってきた」といえば、質問してすぐに答えてくれたことで、即答のこと。これを「カンパツ」と読む人がじつに多いが、「カン、ハツ」と区切っていわなければおかしい。魚のカンパチと違うのだ。

この言葉は中国の古典『文選』^{もんぜん}からきており、間に髪の毛一本も入れる余地もないことをいい、転じて、すこしのゆとりもないこと、即座の意味になったもの。この意味さえ知っていれば「間発」と書き誤ることも、「間髪を移さず」などということもないはずだ。

6

さいさきが悪い

というのはへんな日本語。

どこがおかしいのだろうか？

ふだん使われている日本語の中で、慣用句が誤って使われている例が多い。そうしたものの一つに、「さいさき」の使い方があ

る。「一軒めから『間に合ってます』とピシャリだもんなあ、さいさきが悪いよ」こんなセールスマンの嘆きはよくわかるし、同情もするが、「さいさき」は悪いことには使うものではない。なぜならこれは「幸先」と書き、本来、良いことに使う言葉だからだ。

「幸先」という字が忘れられ、「最先」つまり、「でだし」とか「はじめ」と誤解しての誤りだ。

7

好事魔多し

の「好事魔」とは何か。①好事家 ②魔

物の一種 ③好事と魔は別もの

「好事魔多し」という諺を、「コウジマ・オオシ」と区切って読む人が少なくない。しかし、これは「コウジ・マ・オオシ」と読みたいところ。

というのは、この諺の意味は、「好い事にはとかく邪魔がはいりやすい」ということで、「好事魔」というものがいるわけでもなんでもないからだ。

似た言葉に「好事家」があるが、もちろんこれは、好事魔とはまったく関係がない。さらに、色魔とも無縁であることはいうまでもない。もっとも、色魔も、女性の幸せな人生に邪魔を入れるものにはちがいないが。



8

二の舞を踏

んでは困る。同じま
ちがいをくり返さず

にこの誤用を直してほしい

「前田君の二の舞を踏まないよう、女性問題には気をつけよう」

前の人のあやまちを繰り返すことを「二の舞を踏む」といつてしまう人はかなり多い。八割以上の人があやまって使っていると思われるのだが、正しくは「二の舞を演じる」、あるいは、多少くどくなるが「二の舞を舞う」という。そして、あやまちをしってしまった場合には「前田君の二の舞となった」などと使う。

「二の舞」は「舞」とあることからわかるように、本来は舞楽からきた言葉だ。「案摩あまの舞」の次に演

じるのが「二の舞」で、これは案摩と同じ舞を何度も失敗しながら舞う滑稽な舞である。ここから、前の人のまねをすることや、前の人と同じ失敗を繰り返すことの意味が出てきた。

このように「二の舞」は舞の一種であるから「踏む」ではおかしいことになる。ただし『新明解国語辞典』のように、「二の舞を踏む」の用例を載せているものもある。たとえ辞書にあって、タップダンスでもあるまい。「踏む」より「演ずる」を使いたい。

では、「踏む」のは何か。「二の足を踏む」であり、「轍てつを踏む」である。前者はためらうことで、後者は「二の舞を演じる」とほぼ同じ。失敗をおそれためらうから、これらにひかれて「踏む」と使ってしまうのであろう。

9

口先三寸

で世を渡るの、どんなに口のうまい詐欺師でも無理。正しくはどう言う？

心にもないいわべだけの言いぐさを「口先」といい、「口先だけでは信用できない」などと使われるが、「口先三寸で人をまるめこむ」というと誤用になる。この場合は、「舌先三寸」と使う。

「口先」も「舌先」も意味がよく似ており、どちらを使ってもいいときもある。しかし、いくらなんでも口先は三寸（約九センチ）もあるまい。あくまでも舌でなくてはおかしい。

なお「舌三寸」ともいい、「舌三寸に胸三寸」といえば、口と心は慎まなければならぬことのとたえである。

10

怒り

心頭

達す

れば、髪の毛も逆立つというものだ

が、頭にくる誤字はどれ？

「もうがまんできない。『怒り心頭に達す』だ！」
激しく怒っているのはわかるのだが、これでは、頭に血がのぼって正しい表現を忘れては困る。「怒り心頭に発す」といわなければ間違い。「心頭」を感情に関係の深い心と頭とでも考えて、双方に達するほど激しい怒りと思っている人が多いようだが、では怒りはどこから出てくるのか。アングルトリスが酔っぱらうテレビコマーシャルではあるまいし、足元から徐々に——ではない。「心頭」は心の中とか念頭のこと、怒りはそこから発するものである。